図書館が日文研と世界をつなぐ
―OCLC他による海外連携と図書館サービス

江上敏哲

国際日本文化研究センターは、資料課による海外向け図書館サービスの一環として、二〇一八年より、「OCLC WorldShare ILLへの参加」と「OCLC WorldCatでの目録情報公開」による海外ILLの本格的な受付」を開始した。海外からの日文研所蔵資料の可視化およびアクセスを強化すること、海外からのILL受付サービスをより便利にかつより省力化すること、そしてこれら海外への研究協力機能の強化により日文研のプレゼンスを上げること、などをねらいとしている。本稿では、本事業の概要と意義、一年経過した時点での実際の効果と課題を報告する。

日文研は「研究活動」と「研究協力活動」の二つを活動の大きな柱とするが、図書館の利用と資料提供はその「研究協力活動」の最前線に位置すると言って良い。大学共同利用機関に付設された図書館として、学生・研究者の受入、外部者来館利用への対応に加え、図書館間の資料提供、すなわちILL（Inter Library Loan）現物貸借・文献複写もまた重要なサービスとして位置づけている。二〇一八年度一年間のILL受付実績は、現物貸借六四五件、文献複写一六一七件にのぼる。そもそも図書館というもの自体、図書館同士の〝横のつながり〟が不可欠である。日文研図書館は年間で約一万冊程度の資料をあらたに蔵書に加えており、日本の学術

図書館としては多い方の部類に入るものの、一方で国内で出版される書籍は年間約八万点と言われる。一図書館でこの世のすべての図書を買い集めることが不可能である以上、ＩＬＬ等の図書館間協力がなければ、利用者が求める資料・情報を満足に提供することはできない。特に海外の大学・図書館のように日本語資料が潤沢に所蔵されているわけではない機関にとって、この問題は切実である。海外の大学で日本語資料の所蔵が最多と言われるハーバード・イェンチン図書館（約三二万冊）は別格で、多くても数万点、あるいは数千点や数百点レベルの蔵書でなんとかまかなっているという機関が大多数である。このような海外の大学・図書館やその研究者・利用者にとっては、北米内・欧州内等での図書館間貸出だけでなく、日本からの資料提供によるサポートがその研究活動を左右することになる。

そこで期待されるのがＯＣＬＣのような世界規模の図書館サービス機関の存在である。アメリカ・オハイオ州に本拠地を置くこの非営利団体は、一七二ヵ国・七万館以上の図書館が参加し、その総合目録である WorldCat には四億タイトル分の書誌レコードが登録されている。日本で同様のサービスをおこなうＮＩＩ（国立情報学研究所）の参加大学が一三〇〇、書誌が一二〇〇万タイトルであることと比べると、その規模の大きさがわかるだろう。この WorldCat をベースとしたＩＬＬシステム・WorldShare ILL には五六ヵ国から一万館以上の図書館が参加し、一年間で七〇〇万件の資料が図書館間を行き交っている。国や分野をのりこえてユーザに資料・情報を届けるインフラとして充分に期待できる存在である。

ただし残念なことに、OCLC WorldCat や WorldShare ILL への日本からの参加はごく少数に留まっている。主な機関に国立国会図書館や早稲田大学等があるが、国立大学や国立の研究所の参加はこれまでなかった。多くの国内の大学はＮＩＩによる総合目録やＩＬＬシステムに参加し、国内サービスの充実に特化しているのが現状である。大学図書館が国内でやりとりするＩＬＬは五〇万件近くにおよぶが、NACSIS-ILL の枠組みを越えて海外に門戸を開いているところは少ない。このため海外の研究者が日本の図書館から資料提供を受けようとする場合には、（一）国立国会図書館に頼むか、（二）早稲田大学図書館に頼むか、あるいは（三）日本の大学の一部が北米大学とのＩＬＬをおこなうために構築したプログラム「ＧＩＦ」を利用する、といった選択肢しかない。そうでなければ個別に交渉するかであろう。しかし海外からのＩＬ

Lを〝受け付けないわけではない〟という大学図書館であっても、ウェブサイト上で大々的に広報するまでには至らない、そこまでの度量や余裕はないということも多い。海外側にしてみれば、たまたまその存在を知っているか、私的なコネに頼る他はなく、さながら祇園の小料理屋かのようではある。あまつさえ（三）のＧＩＦが二〇一八年三月をもって終了することが決定され、日本の海外ＩＬＬ受付はきわめて厳しいものとなりつつあった。

日文研図書館においても海外ＩＬＬ受付はこれまでごく少数の例外的対応しかできておらず、ハードルの高さが長年の課題であった。その解決のため、毎年海外でおこなわれる日本研究司書の国際会議であるＥＡＪＲＳ（ヨーロッパ日本資料専門家会議）やＮＣＣ（北米日本研究資料調整協議会）に参加し、海外の日本研究者やライブラリアンへのニーズ調査や相談・ディスカッションを重ねてきた。その結果、日文研の「海外への研究協力」という機能を強化するためには、図書館サービスとしての海外ＩＬＬ受付の強化、その前提としての総合目録による情報発信、そしてそのインフラとしてＯＣＬＣを選択することが最適であろう、と判断するに至った。できることならNACSIS-CATという国内大手の総合目録システムがＯＣＬＣと連絡してくれれば最良ではあるが、どうやらその望みは薄そうであるとわかり、独自の参加を選ぶことになった。

ＩＬＬ受付を実現するためには、所蔵する大量の目録情報を総合目録データベースに登録することと、料金の授受をスムーズな仕組みとすることが不可欠である。日本におけるＯＣＬＣの代理店は紀伊國屋書店であり、二〇一六年頃からその担当者に相談を持ちかけ、これらについての検討を重ねてきた。その過程で、ＯＣＬＣの欧州アジア太平洋地域担当部署から提案を受け、大量の目録情報の一括登録が実現するに至った。併行して、ＩＬＬシステムの導入も準備が進められた。海外ＩＬＬ受付における最大の難所が「料金を海外からどのように受け取るか」であり、国内の多くの大学図書館がこれによってサービスを阻まれる。OCLC WorldShare ILLにはＩＦＭという料金授受を効率化するシステムがあり、かつ実際の請求・支払処理は国内代理店の紀伊國屋書店とおこなうことが可能である。これらの利点と財務課の協力により、この難所もクリアすることができた。

結果、まず二〇一八年一月にWorldCat上への目録情報の登録が完了した。すでにWorldCat上に同一資料の書誌があ

る場合は所蔵情報だけを登録（約一三万件）するが、WorldCat に無いものを日文研が所蔵していれば新規に書誌情報が登録され、その数は約一七万件に及んだ。また本事業では、すべての書誌情報にあらたに日本語ヨミのローマ字形が一括付与されている。このローマ字データはその後、日文研のローカルシステムにも登録された。

ついで二〇一八年四月から、WorldShare ILL を介した海外ＩＬＬの本格的な受付が開始された。当初、大量の依頼件数による業務負荷や国をまたいだやりとりによるトラブルが心配されもしたが、結果的には日常業務の範囲内でこなすことができるレベルに落ち着いていると言ってよい。二〇一八年度一年間の受付件数は二三六件（複写一六一件、貸出四七件、全頁複写二七件、寄贈一件）で、北米が最多ではあるが、アジア、ヨーロッパ等の各国から幅広く依頼がある。想定外だったのは中国語や韓国語等の日本語以外の資料にも依頼があったことで、海外ユーザのニーズの実際を知ることができた。一方、受け付けられなかった謝絶件数は二八九件と、受付件数よりも多い。その多くは、所蔵しない資料へのリクエスト（一〇五件）、自国内・北米内にある資料へのリクエスト（七二件）等、先方の確認不足に由来するものである。

ＩＬＬ受付が順調なだけでなく、蔵書への日々の問い合わせや閲覧依頼が増えたこと、海外とのやりとりにおけるコストやトラブルに関する知見が得られること、日文研の存在と意義を広報できたこと等、総じてメリットが多かったと言える。一方でのこされた課題として、毎年のＯＣＬＣへのＩＬＬ参加料・目録登録料をどのようにまかなっていくか、ＩＬＬ料金に反映させるべきなのか、という問題がある。また WorldShare ILL やＩＦＭに対応していない大学・図書館も依然多く、受付方法は引き続き検討しなければならない。

そして最後に、日文研図書館五六万冊の蔵書だけで海外からの多種多様なリクエストすべてに対応できるわけではない。より多くの国内機関・大学図書館による同様の取り組みがなければ、本当の意味で有効な海外への資料提供体制は実現できないのである。本事業において得られた知見を、本稿のようなかたちで発信し、共有することによって、他機関の同様の取り組みを少しでも促すきっかけとなることができれば、幸いである。

（国際日本文化研究センター資料課資料利用係）